

映画『フリーダ』のメキシコ文化入門としての役割

経営学部
丸谷雄一郎

『フリーダ』は2003年のアカデミー賞で2部門（作曲賞、メイクアップ賞）を受賞し、フリーダを演じる「サルマ・ハエック」は製作も担当し、主演女優賞にノミネートされた。監督はミュージカル『ライオンキング』の演出や、シェイクスピアの名作戯曲「タイタン・アンドロニカス」を映像化した『タイタス』で衝撃的な印象を与えた「ジュリー・テイモア」である。

映画はタイトルとなっているメキシコの女性画家「フリーダ・カーロ」の一生を、その夫で1922年に始まったメキシコ壁画運動の3巨匠の1人である「ディエゴ・リベラ」との愛の変遷を通じて描いている（メキシコ壁画運動に関して詳細は、加藤薫『メキシコ壁画運動』現代図書、2003年を参照）。

主人公フリーダは1907年に生まれ、お転婆な少女だったが、18歳で遭遇したバスの大事故によって全身を骨折し、棍棒が子宮を貫通し、一生を肉体的な痛みの中で過ごした。そして、ディエゴとの結婚生活は、彼女に精神的な痛みを一生与え続けることになった。ディエゴはロシアからの亡命者トロツキーをはじめ多くの文化人を受け入れていた当時のメキシコサロンの中心であり、際限ない浮気を続け、フリーダの実妹との浮気は決定的な痛みを与えた。しかし、彼の与えた痛みが皮肉にも彼女の中の才能を具現化することになった。映画の中でも、彼女の自画像を中心とする多くの作品が彼女の心情を象徴的に示すのに用いられている。



フリーダに酷似する主演女優サルマ・ハエック

（写真はアスミック・エース エンタテインメント株式会社より提供していただきました。）

この映画は、「フリーダ初心者への入門」的位置づけでみると非常に興味深い。多くのメキシコを題材としたハリウッド映画は、非常に表面的なメキシコのイメージを描いてきた。この映画も一部に工夫がこらされているとはいえ、非常に表面的であり、解説的である。フリーダの絵画を見たときに受ける「痛さ」はほとんど感じられないし、この映画が描くメキシコのイメージも観光ガイドの域を出ない。ロシアから亡命したトロツキーがフリーダとともに、メキシコシティ郊外のティオティワカンのピラミッドを登るシーンにおいて、トロツキーがティオティワカンのピラミッドの上から平原をみて、メキシコ全体を語っているシーンがあるのだが、メキシコ初心者トロツキーの語りは、この映画の対象であるメキシコ初心者のメキシコに対するフロンティアとしてのイメージを代弁しているように感じられた。

私はこうしたメキシコに対する多くのアメリカ映画の描き方に嫌悪感を覚えてきた。しかし、この映画の入門書的な表現をなぜか心地よく見てしまった。おそらく、この心地よさの源泉は、映画の中に現れた製作者達のメキシコへの思いにあるのだろう。フリーダを演じる「サルマ・ハエック」は自身をフリーダに酷似させ（写真参照）、ディエゴを演じる「アルフレッド・モリーナ」も体重

を増やした上に詰め物までして、ディエゴの象のようなイメージを醸し出した。スタッフにもメキシコ出身者を多く配し、特に、撮影の「ロドリゴ・ブリエト（語研ニュース第7号で紹介した「アモレス・ペロス」でメキシコの現在を描き出した）」は、アメリカ人に理解できるメキシコのイメージを素直に伝えようとしている。

当時のメキシコ文化は、この映画の描く表面的なイメージとはかけ離れ、古代文明の中心としてのメキシコ、植民地時代のメキシコ、革命後のナショナリズムが台頭したメキシコが融合した非常に複雑なものであった。しかし、メキシコ初心者にとって、2時間余といった時間でこうした複雑な構図を理解し、独特の世界観に入っていくことは難しい。

この映画は複雑な構図を持ち、欧米と異なる世界観を持つメキシコ文化を、初心者にとってわかりやすく示している。この映画を見た後、実際にフリーダの作品やディエゴの壁画をみれば、メキシコ文化に対する理解が深まるだろう。特に、フリーダの作品の多くは、彼女の肉体的精神的痛みを理解することで始めて感動を与える作品であり、そういった意味でも、この映画は彼女の作品を理解するための入門書的な役割を十分果たしう力を持っている。

こうした映画のメキシコ入門的役割は製作されたアメリカだけではなく、日本でも変わらない。この映画公開にあわせて、フリーダ関連の展覧会（東京、大阪の後、名古屋では名古屋市美術館で11月1日より12月21日まで「フリーダ・カーロとその時代」として開催後、高知へ）が開催され、雑誌での特集なども組まれた。ぜひ、映画を先にみて、展覧会を訪れることをおすすめする（もちろんメキシコを訪れる際にも、事前にみておくことをおすすめする）。この展覧会では、映画でも登場した多くのメキシコの芸術家達の作品も多く紹介されている。

また、岡本太郎がこの度メキシコで制作した壁画が発見され、メキシコの壁画芸術が注目されているが、フリーダの夫ディエゴ・リベラに代表さ

れるメキシコ壁画運動時の作品もスケールが大きく独特の色彩感覚が素晴らしいので、メキシコを訪れる機会があればぜひ鑑賞して欲しい。

中国の携帯電話

法学部
鄭 高咏

カラーテレビ、冷蔵庫、洗濯機。この三つの電気製品を、かつて日本では「三種の神器」と呼んだそうですね。日本が敗戦から立ち直り、たくましい経済成長を始めた一九五〇年代から六〇年代にかけて、市民にとって「おかねがあれば買いたい製品」が、この三つだったと聞いています。

テレビや冷蔵庫がすでに普及してしまった現在の「三種の神器」とはなんでしょう。

先日、大学で新聞を読んでいたら「プラズマテレビとデジタルカメラ、DVDレコーダーが新しい三種の神器と呼ばれる」とありました。

量販店ではこの三つが大人気だとか。洗濯機や冷蔵庫などは家事を楽にしてくれる電気製品として普及しましたが、現代は生活をより楽しく、充実させてくれる製品が売れるようです。みなさんにとっても「おかねがあれば買いたい製品」はこの三つではないでしょうか。

ところで、中国でも市民に人気がある製品を「三種の神器」と似た言葉で呼ぶことがあります。中国語で「三件」と言います。

十年くらい前までは、中国の大学生のあこがれの「三件」は「ラジオ、ウォークマン、ポケベル」でした。日本とちょっと似てますね。